

天皇の喪葬と皇位繼承

原 島 修

はじめに

七世紀末の持統天皇より近代に至る約千二百年間、我が国の皇位繼承はそのほとんどが生前讓位によって行われてきた。一方持統天皇以前の皇位繼承は、『日本書紀』の記述を無批判に受け入れる限り、ただ一例（皇極↓孝徳）を除いて全て前天皇の死を契機に行われていた。この持統天皇以前の形態の様に、前天皇の死を契機に皇位繼承が行われる場合、前天皇の喪葬の儀式は、皇位繼承の手續きの上で重要な位置を占めると思われる。例えば朱鳥元年（六八六）九月より、約二年三ヶ月に渉って行われた天武天皇の殯では、皇太子草壁皇子が喪儀礼奉獻の主催的立場にあり、これにより喪主として、また大行天皇天武の正統の後継者としての地位にあることを、自ら宮廷内外に印象付けた。

この様に、七世紀末の持統天皇以前は、天皇の喪葬と皇位繼承の手續きが有機的に結び付いていた。しかしながらそれ以後の様に、生前讓位による皇位繼承が行われるようになると、それ以前にあった天皇の喪葬と皇位繼承の有機的關係に、何らかの変質があらわれることが予想される。確かにその崩御から埋葬までの期間が、七世紀以前はゆうに半年以上あったものが、八世紀前半、特に元明天皇以降はおよそ一〜三週間程度に短縮化される。だがこうした現

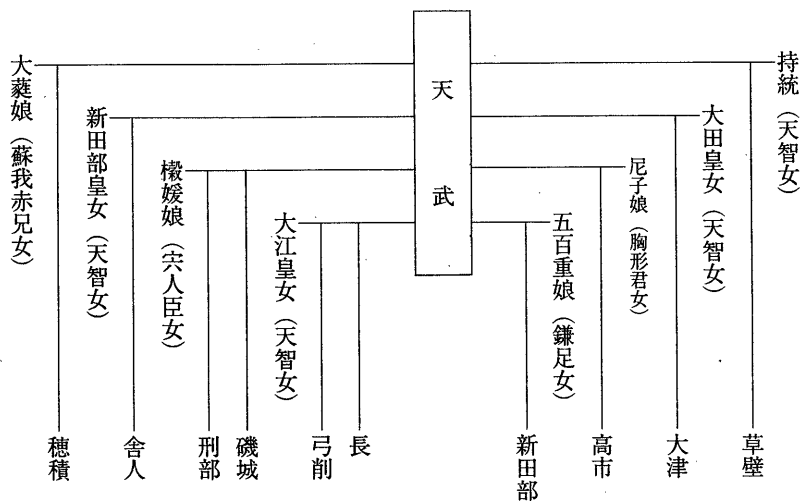
象面の変化が、古代国家最大のイベントである皇位継承の手続きに、どれほどの変化を与えるものか。七世紀以前の喪葬と皇位継承の関係については、殯に関連して民俗学、⁽²⁾文献史学両方からの研究があるものの、喪葬の形態に大幅な変化の現れた八世紀以降についてのこうした先行研究は、管見の限りにおいて未だ無かったように思われる。この稿では八世紀における天皇の喪葬と皇位継承との有機的関係を、現象面における変化を念頭に置きながら、その実態を明らかにしたい。

第一章 七世紀以前における天皇の殯と皇位継承―前史として―

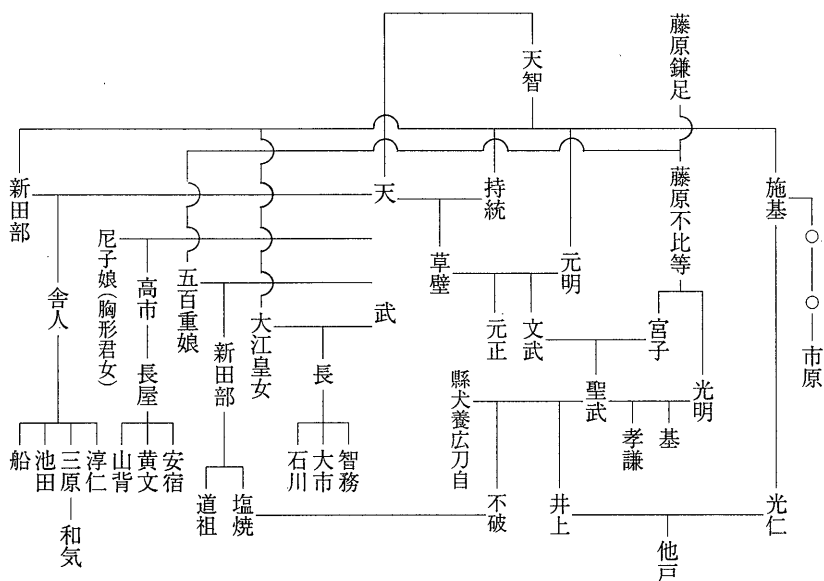
第一節 草壁／大津／高市／天武後継をめぐる争い（系図1参照）

時に朱鳥元年九月丙午、病ついに癒えず天武天皇が正宮に崩御された。同月辛酉には、持統二年（六八八）十二月乙丑まで約二年三ヶ月に渉る殯が南庭にて開始された。この日『日本書紀』によれば大津皇子が皇太子（草壁）に謀反を企てたとある。所謂大津皇子の変である。大津皇子の変の詳しい考察は他書に譲るとして、まずは天武の殯が、特にその後の皇位継承にどのような影響を与えたかに注目し、関連を示唆すると思われる幾つかの要素を抽出して、七世紀以前の皇位継承と喪葬との有機的関係の、ひとつのモデルパターンを描き出してみたい。

壬申の乱に勝利して皇位を得た天武天皇には十名の皇子が存在した。年齢的、血統的にいづれ劣らぬ皇位継承有資格者が並び立つ状況であったが、天武十年（六八一）二月には草壁皇子を立てて皇太子に定め、後継者問題にはひとまず決着がついたかに見えた。しかし『日本書紀』天武十二年二月己未朔条には、「大津皇子始聴朝政」とあり、草壁皇太子の「以令撰万機」に抵触する役割が与えられた。これは数人の皇位継承予定者を並立させる大兄制の残存形態とも見られるが、ようするにこの時期の皇太子はのちの律令皇太子制のように確実に皇位が継承される安定的な立



系図1 天武諸皇子の血統



系図2 天智・天武系皇統系図

場ではなく、いまだ流動的に移り変わる可能性を持つものであったと解釈すべきである。草壁皇子、大津皇子は共に天智天皇女の所生子で、草壁皇子の母鷗野讃良皇女と大津皇子の母太田皇女は同母姉妹の關係にあった。草壁は大津より一歳年長であり、母鷗野讃良皇后の存在により、ライバルの大津に一步リードしていた。しかし大津、草壁共に血統的には優劣つけがたく、年齢の一歳違いはさほどの影響を及ぼさない。『懷風藻』大津皇子伝によれば皇子は文武に優れ、士を遇するに厚く、人氣は絶大であったという。

もう一人注目すべきは高市皇子である。高市皇子は筑前の豪族胸形君德善の女尼子娘を母に持つ。生年は白雉五年（六五四）もしくは斉明元年（六五五）とされ、天武皇子中最年長であったが、所謂卑母の出自であったため、皇位継承順位では他の皇女腹の皇子達より不利な立場にあったが、壬申の乱当時にはすでに成人し、軍を統帥し、戦後処理にあたるなどの功績により、諸皇子中の順位は常に草壁、大津に次ぐ位置にあった。後年次第に宮廷に重きをなし、持統朝で太政大臣に任じられ、持統七年正月にはかつての草壁皇子に並ぶ浄広壹位を授けられている。確かに天武崩御前後の高市の皇位継承権は、草壁大津両皇子に較べて極く弱いものであっただろう。しかし近江朝の太政大臣大友皇子の例もあり、彼を候補者に推す勢力の存在を想定するのは難くない。資格的にやや劣るとはいえ、三番目の皇位継承候補者として意識されていたのは間違いないであろう。

朱鳥元年十月庚午、大津皇子は詔語田の舎に死を賜った。鷗野讃良皇后と草壁皇子はこれでもっと有力なライバルであった大津皇子を葬り去ったとはいえ、未だ草壁の皇位継承に関しては宮廷全体の合意がなっていたとは考えられず、予断を許さないまま二年三ヶ月の殯が始まった。

第二節 喪葬儀礼

殯は死者を埋葬するまでの間、仮の安置所に納め、各種の儀礼を行うことをいう。儀礼の目的は招魂¹⁰、もしくは鎮

魂と意見の対立があるが、天皇の場合数ヶ月以上の殯を経て埋葬されるのだから、招魂の必要性はあったとしても数日後には失われ、鎮魂が主目的となる。

文献上に見える儀式の形式には、葡萄酒礼、ミネタマツル（発哀、慟哭等表記が数種類みられる）こと、誄などがある。前二種は悲哀を身体の動作で表現するもので、腹這い、声を挙げて泣くことによって霊を慰めんとした。東アジア世界において普遍的に見られる儀礼である。誄は詞によって生前の事業や経歴の顕彰等を行う。また大化薄葬令条文には殉死、断髪等の行為を禁じる文章があり、そうした習俗が存在した可能性もある。ここでは天武の殯宮で行われた儀礼について、皇位継承とどの様に関わるのか見てみよう。

① 誄

和田萃氏は大津皇子の変における「謀反」の具体的行為を、天武殯宮で行われた誄の奏上に求められ、「大津皇子の言辭——誄と考えてよい——の内容が不穏当なものであった」と推測されている。同時に天皇の喪儀礼における誄はただ魂の慰撫にとどまらず、a 誄奏上者の政治姿勢の表明もしくは、b 次期皇位継承者の確定の場、方法であるという。a は新天皇の即位と同時に大臣、大連を同一人物であっても改めて任命するという慣習が示唆するように、天皇との個人的関係によって政権が維持される段階においては、前天皇の殯は新しい天皇の時代に実権を握るための準備期間として重要であった。敏達殯宮で誄を奏上した蘇我馬子と物部守屋が、お互いの誄を誹り合い、「由是二臣微生怨恨」じたのは端的にそれを証明する。

b は同じく敏達殯宮で穴穗部皇子が「欲取天下。発憤称曰。何故事死王之庭。弗事生王之所也。」と発言したことが想起される。この時すでに橘豊日皇子が太子としてあったが、先に述べた様に大兄制のもとでは一人への確実な皇位継承が約束される訳ではなく、欽明天皇の子であり、大連物部守屋の後押しを得ていた穴穗部皇子のその皇位継承権を誇示する意図が、この誄として結晶したのである。もう一度和田氏の言葉を借りると、「敏達天皇の殯宮における

穴穂部皇子の言挙げが、亡き敏達天皇や敏達朝の太子であつたと推測される橘豊日皇子に対してきわめて不遜なものであることを思う時、（中略）かねて、有力な皇位継承資格者である大津皇子を排除せんと考えていた草壁皇子らに、大津皇子逮捕に恰好の口実を与えたのである」。

大津皇子の変は、九月辛酉（廿四日）の「謀反於皇太子」から、十月己巳（二日）の逮捕まで九日間あり、大津皇子の謀反は、草壁皇子に対する暴力的直接行動でないことは確かである。『懷風藻』川嶋皇子伝に見える密告もこの誅の言辭を叩き台にしたものであるとすれば納得のいく説明である。誅は言葉を媒介とする儀礼であるだけに直接的な効果を發揮するし、同時に穴穂部皇子や大津皇子の様に悲劇的な結末をも誘発する。

② ミネタテマツル

持統元年正月朔、皇太子草壁皇子は公卿百寮人等を率いて、殯宮に「慟哭」した。これを最初の機会として、皇太子主権による「ミネタテマツル」は同月庚午、五月乙酉、二年正月朔、十一月戊午と引き続き行われ、計五回におよぶ。草壁皇太子の他にミネしたことが見えるのは、僧尼（僧衆）三回、新羅王子金霜林等新羅の使者が二回、主権者名なしが三回となる。また皇太子に率いられて、または同日にミネしたのは、公卿百寮人五回、僧尼二回、膳部や采女等、衆庶、諸蕃の客が各一回となる。

ここに個人名が明らかなのは新羅の客である金霜林のみで、この儀礼に関しては草壁皇太子の独壇場と言えよう。特に草壁⁽¹⁶⁾のミネには常に公卿百寮人が付き従っている。一方他の八人の天武皇子達の天武殯の間の消息は全く伝わっていない。こうしたことから見ると、草壁の喪葬儀礼への参加は、喪主Ⅱ皇位継承者という図式を強調させる意図があり、また同時に高市以下諸皇子に対する示威行為でもあったと思われる。大津皇子を葬り去り、皇位継承への布石を一手打ち終えたとはいえ、壬申年の功臣高市皇子や他の皇女腹の皇子達は、未だ草壁の皇位継承を脅かす存在であつた。ミネを行い、喪主Ⅱ皇位継承者としての自己を強調することが、草壁の打つべき布石の一つであつたのである。

③ 「已先祖等所仕状」～服属儀礼

天武の死から一年余り経過した持統元年十月壬子、皇太子草壁は公卿百寮人、諸国司、国造及び百姓男女を率いて天武を葬る陵、すなわち大内陵の築造に着手した。明くる年の八月丁酉の『日本書紀』同日条には「命浄大肆伊勢王奉宣葬儀」とあり、この頃には大内陵も完成し、いよいよ葬儀にむけての準備が始まった。そして十一月戊午には公卿百寮人に加え諸蕃賓客を率い、記録上では最期のミネを奉った。この日楯節儼の奏上があった後、諸臣らによって「各奉已先祖等所仕状遞進誅」が行われた。これはそれぞれの氏族の先祖達が歴代の天皇に仕え奉る状を誅に託して読み上げることによって、己が氏族と天皇との結び付きを強調し、同時にそれぞれの氏族系譜を明らかにするものである。そして現在に到って奏上者自らの仕え奉る状を読み上げる事によって亡き天皇の霊を慰めんとしたのである。

この十月壬子の儀礼は、天武埋葬の一週間前に行われ、二年三ヶ月の長きに渉って行われてきた殯もほぼ終わろうとしていた。ここに到って不安定であった皇嗣問題も、草壁皇子擁立の方向に固まっていたであろうこの時に、諸臣が「已先祖等所仕状」を奏上したのは、先帝天武に対する哀悼の辞であるのと同時に、先祖代々先帝天武に到るまで仕え奉り、今また新たに皇位を継承する草壁皇子に仕え奉ることを誓う、服属の再確認の目的があったと考えられる。

④ 「皇祖等之騰極次第」～日嗣の誅と和風諡号

新天皇への服属儀礼が終わり、皇位の行方も定まった頃の十一月乙丑、天武の大内陵への埋葬に先立って當麻真人智徳による誅が行われた。『日本書紀』同日条によると「奉誅皇祖騰極次第。古云日嗣」という。當麻智徳は後の持統、天武の殯においても和風諡号献呈と埋葬に先立っての誅を奏上している。

a、天武殯 日嗣の誅↓埋葬

b、持統／文武殯 誅↓和風諡号献呈↓埋葬

右に天武、持統、文武の殯終了時の式次第を掲げてみた。持統以降は例外もあるが、大体このパターンで進行してい

る。bの誄の内容が何であるか『続日本紀』には記載が無いものの、誄の奏上者がいずれも當麻智徳であること、また皇極元年（六四二）十二月壬寅（廿一日）の舒明天皇埋葬に先立つ七日前の乙未（十四日）に、息長山田公によって日嗣の誄が奏上されていることなどから、日嗣の誄であると考えられる。またaでは和風諡号の献呈が見られない。天武には天淳中原瀛真人天皇という諡があるが、それはいつ献呈されたのだろう。『続日本紀』天平勝宝八歳（七五六）五月十九日条には聖武太上天皇の埋葬にあたつて「太上天皇出家歸佛。更不奉諡」とあり、諡を奉らないことになっているが、同時に日嗣の誄と思われるものは、同日条に見当らないし、それ以前にも記載が見当らない。ということはどうやら日嗣の誄と和風諡号の献呈は同時に行われることになっていたらしく、天武の諡号は埋葬当日に献呈されたと考えられる。この日嗣の誄と同質のものと考えられるのに、推古廿年（六一二）二月に行われた皇太夫人蘇我堅塩媛の改葬にあたつて、蘇我馬子が多数の支族らを率い、同族の境部臣摩理勢に読み上げさせた「氏姓本」がある。天皇家の日嗣にしろ、蘇我氏の氏姓本にしろそれぞれの家の系譜のようなものであるうと思われる。これらは、喪儀礼の最後に行われるもので、儀礼の位置付けの中でも特に重要と思われる。

ここでひとつ注目しておきたいのは、日嗣の誄をした息長山田公、當麻真人智徳、氏姓本を誄した境部臣摩理勢はそれぞれ天皇家、蘇我氏の近親氏族に所属するもので、いわば同族といつてもよい存在である。また堅塩媛改葬の儀式が行われた¹⁷輕街は蘇我稻目の邸宅のあった地で、いわば蘇我氏の勢力範囲であった。儀式の行われた地、そして参加する者が同族であることは、この時期の喪葬はたとえ天皇やその夫人といった身分の高い階級に属するものであったとしても、死者の近親の主導によって行われるという原則があったことである。第2表に示すように、また¹⁸蘇弘道氏が説くように、親王以下諸臣の薨卒時に国家から派遣される¹⁹監護喪事の官人の筆頭人は死者の近親者が多く、このことを裏づける。これは皇位継承とは直接関係しないが、次章を語る上で欠かせないので心に止めておかれたい。

第三節 殯の期間について（第1表参照）

『隋書』『倭国伝』には「貴人三年殯於外」とある。三年は足かけ三年と好意的に解釈するとして、相当長期に涉つて行われた様で、期間がある程度明らかな天皇の場合、およそ半年～一年程に涉つて行われ、最長では反正天皇が六年十一ヶ月の長きに涉つて埋葬されなかった。これほど長期に及ぶのは稀であったが、時代が下っても天武天皇の二年三ヶ月という例もあり、殯は時代、時期によつての期間の傾向というものは無い。しかし殯の期間はその当時の政治状況に左右されやすく、天皇不在の期間でもあるため、動搖期にはきわめて長期化される傾向がある。

安康天皇から雄略天皇への皇位継承は、眉輪王による安康暗殺という異常事態のなかからはじまり、雄略即位に至るまで、八鈞白彥皇子。坂合黒彥皇子。眉輪王。葛城円大臣。市辺押磐皇子。御馬皇子と約三ヶ月の間に六人の犠牲者を出しながら行われた。敏達天皇崩後には、その敏達殯の誅の奏上に端を発した蘇我、物部の対立が激化し、天皇が埋葬されたのは崇峻天皇四年（五九一）四月、じつに五年八ヶ月の後であった。またこの時期、後継の用明天皇は在位二年に満たず崩御、その間穴穂部皇子、泊瀬部皇子はそれぞれ物部守屋大連、蘇我馬子大臣を後ろ盾として皇位を争った。齐明天皇崩後は白村江の敗戦から数年間、大陸、半島との交渉に忙殺され、また中大兄皇子による皇太子称制の時代が続き、天智即位は齐明崩後八年を経てからのことだった。もっとも齐明の埋葬⁽²⁰⁾記事には、娘の間人皇女との合葬とみえるので、この時は改葬であった可能性もある。

もう一つ、反正天皇の六年十一ヶ月の殯に注目したい。反正天皇崩後、群臣は天皇の同母弟、雄朝津間稚子宿禰皇子（允恭）に即位を要請した。しかし皇子は先皇に「其長生之⁽²¹⁾。遂不得継業。」と叱責され、「兄二天皇。愚我而輕之。群卿共所知」として一度は願いを退けた。この逸話は允恭天皇の謙讓の美徳をあらわすものとして挿入されたものと思われるが、この時期、もう一人の皇位継承候補者として大草香皇子があり、右の挿話は、あるいは允恭が皇位

第1表 歴代天皇殯期間一覧表

天皇名	年 月	天皇名	年 月	天皇名	年 月
神武	1・6	雄略	1・2	舒明	3
崇神	9	清寧	11	孝徳	2
垂仁	5	顕宗	1・6	斉明	5・7
景行	2・1	仁顕	3	天智	?
成務	1・4	武烈	1・10	天武	2・3
仲哀	?	継体	10	持統	1・0
神功	6	安閑	1	文武	5
応神	?	宣化	9	元明	(1週間)
仁徳	10	欽明	5	元正	(1週間)
履中	7	敏達	5・8	聖武	(17日)
反正	6・11	用明	3	淳仁	?
允恭	10	崇峻	なし	称徳	(2週間)
安康	3年後	推古	6	光仁	(2週間)

* 1 この表は『日本書紀』、『続日本紀』によって作成した。欠史八代は削除した。

* 2 用例「神武1, 6」は1年6ヶ月をあらわす。

第2表 8世紀天皇喪葬における臨時官司任命の身分別分類表

天皇名		親王	諸王	真人	諸臣	総 計
持 統	カミ	4				皇親8、真人2、諸臣7
	スケ		4	2	7	
文 武	カミ	2	1		1	皇親4、真人1、諸臣14
	スケ		1	1	13	
元 明	カミ		1		1	皇親1、真人0、諸臣2
	スケ				1	
元 正	カミ		2		1	皇親6、真人0、諸臣7
	スケ		4		6	
聖 武	カミ			1	3	皇親4、真人4、諸臣13
	スケ		4	3	9	
称 徳	カミ			1	5	皇親2、真人1、諸臣24
	スケ		2		19	
光 仁	カミ			1	4	皇親0、真人11、諸臣19
	スケ			10	15	

* カミ、スケの区別は、その記載が有るものについてはその通りにし、無いものは、それぞれの官司の筆頭にあげられた者を長官（カミ）とする。それ以下は全て次官（スケ）とする。

継承者としての資格に欠けるところがあったことを暗示している可能性もある。『日本書紀』允恭即位前記では「仁惠儉下」としながらも、治政五年十一月の反正天皇埋葬記事以降は、衣通郎姫との情事や太子木梨輕皇子の近親相姦など、スキャンダラスな記事が多く登場するのも、暗示的である。允恭治政期の業績としては、盟神探湯によって氏姓を定めたことが知られるが、これも反正の殯の期間内のことである。あるいは殯宮に安置された前天皇反正の遺骸こそが、ひとつのレガリアとして機能していた事も考えられる。勿論これは推測の域を出ないが、天皇の喪葬と皇位継承の手続きが不可分の関係にあるとすれば、あながち的外れとも言えないだろう。

第四節 殯の変質

八世紀の持統、文武の殯はそれぞれ一年、五ヶ月の長期に涉っていたが、次代の元明天上天皇は崩後一週間で埋葬された。以後は一〜三週間で埋葬されるようになり、一気に短縮化された。喪儀（殯）の短期化への転機として大化薄葬令とその浸透を指摘する学説⁽²²⁾もあるが、時期的にも大分離れていてあまり納得できない。それに薄葬令は皇子女以上に対する規定が見られず、一般の官人や庶民についてはそうであったとしても、もともと天皇の殯はそれらの階級のそれと同一視は出来ない。また林紀昭氏は薄葬令前後の古墳調査例から、薄葬令は必ずしも遵守された訳でなく、実効性は極めて薄かったとしており、筆者もこの見解に従う。和田幸氏は火葬と仏式葬儀の導入による期間の短縮を説かれている。火葬の導入は、普通殯宮で数ヶ月かけて死屍が白骨化していくのに比較して、数時間で白骨化する火葬によって期間に対する意識レベルでの転換があったと和田氏は説かれるものの、天皇として初めて火葬に付された持統が約一年、つぎの文武が約五ヶ月の殯を経て火葬に付されている事実を考慮すると、その意義はさほど重要ではない。仏式葬儀の初見としては、文武の殯において僧尼が「哭」した事等が見られる。これを嚆矢として、八世紀の元明天皇以降では七日毎の追善供養など仏教的葬儀の浸透は顕著となり、期間の短縮も同時進行していく。しかしな

から、これだけでは元明以降の極端な期間減少の説明には成り得ないのではないか。

無論これらの影響は無視できず、特に薄葬令の背後には厚葬への怨嗟と薄葬への社会的要請があっただろう。持統以後の天皇が薄葬を旨とすべき遺詔を残しているのは、こうした社会的要請を配慮しての言葉であっただろうが、しかし主目的要因は他に求めるべきであろう。それは律令体制の整備と、讓位による皇位繼承が一般化されたことに求められる。殯が次期天皇の確定と次代の政權形成期間であったとすれば、新天皇の即位に当って改めて大臣、大連を任命するという慣習自体が消えた律令体制下においては、次代の政權形成期間という意義自体が無効になる。またすでに生前の讓位によって皇位繼承は終わっていた。特に殯期間が大幅に減少した最初の例である元明、次いで元正が中継としての役割を担っていた天皇であったことは、殯期間の減少の要因が生前讓位であったことの証左となり得る。

古代の女帝は皇位繼承にまつわる動揺期に現れやすい。元明以前に同じく中継ぎとして即位した女帝は推古、斉明（皇極重祚）、持統と四代あるが、共通するのは全て皇后の地位にあったということだ。元明は草壁皇太子の正妻で、前天皇文武の母ではあったが、草壁は皇位に即くことなく薨じ、したがって元明も皇后の地位にないままでの即位であった。元正に至っては独身のままで、元明の女、文武の姉という資格のみでの即位であった。持統にしても生前讓位ではあったが、元明、元正のそれと同一線上で語ることは出来ない。即位するための資格に欠ける両天皇の存在が殯期間の減少の契機となったものと考えられる。また皇太子皇嗣制が確立に向かいつつあった八世紀前半の皇位繼承形態において、殯の持つ重要性が失われたことが、殯の短期化をもたらし直接の要因であると考えられる。

文武の殯以降正史の上からは、「殯」という表記は全く見られなくなる。『万葉集』においても二一九六に「明日香皇女の木庭の殯の宮の時」とあるのを最期に「殯」の文字は見られなくなる。但し『萬葉集』では「殯」をアラキと訓み、三三四四一の「長屋王賜死之後、倉橋部女王作歌」に「大荒城」の表記が見え、喪儀礼としてのモガリが正史の上からは消滅したものの、全く行われなくなった訳ではない。ただ天皇の殯は他の階級のそれとは違った意味

あいが強く、天皇の喪儀礼としての殯は八世紀初頭に大きく変質し、実質的には終息した。しかしそれ以後、天皇の喪葬は皇位継承との関係を全く失ってしまったのだろうか。これについては次章で検証する。

第二章 八世紀の天皇喪葬と皇位継承

第一節 喪葬臨時官司の任命と諸王階級の参加をめぐる

天平廿年（七四八）四月廿二日、前日の元正太上天皇の崩御をうけて、御装束司、山作司、養役夫司など喪葬を司る臨時官司の官人が任命された。いささか長文になるが『統日本紀』の同日条を引用し、これらの臨時官司に任命された人々を眺めてみよう。

a 元正太上天皇喪葬司任命 『統日本紀』天平廿年四月廿二日条

辛酉。以從三位智努王。石上朝臣乙麻呂。從四位上黃文王。從四位下大市王。正四位上紀朝臣麻呂。從四位下藤原朝臣八束。爲御装束司。六位已下八人。從三位三原王。從四位上石川王。道祖王。從四位下紀朝臣飯麻呂。吉備朝臣真備。爲山作司。六位已下八人。從五位上阿倍朝臣嶋麻呂。外從五位下丹比間人宿祢若麻呂。爲養役夫司。

六位已下十人。

右の記事に見られる特徴として天武系二、三世王の参加が目立つ。こうした傾向はこの時を端緒として、約十二年程、天平宝字四年（七六〇）の光明皇太后の喪葬の時まで続く。まずは元正太上天皇の喪葬に続く、大皇太后藤原宮子、聖武太上天皇、光明皇太后の喪葬臨時官司任命記事を紹介する。

b ① 大皇太后藤原宮子喪葬司任命 『統日本紀』天平勝宝六年七月廿日条

癸丑。以正一位橘朝臣諸兄。從三位文室眞人珍努。紀朝臣麻路。正四位下安宿王。從五位下厚見王。從四位下多

治比真人國人。從五位下多治比真人木人。紀朝臣男楨。阿倍朝臣毛人。石川朝臣豐成。外從五位下文忌寸上麻呂。爲御裝束司。六位已下十二人。從二位藤原朝臣豐成。從三位多治比真人廣足。藤原朝臣永手。從四位上池田王。

正四位下大伴宿祢古麻呂。從四位上文室真人大市。正五位上佐伯宿祢今毛人。從五位上縣犬養宿祢古麻呂。從五位下紀朝臣廣名。栗田朝臣人成爲造山司。六位已下廿一人。

b—②大皇太后藤原宮子葬儀 『統日本紀』天平勝宝六年八月四日条

八月丁卯。正四位下安宿王率誅人奉誅。諡曰千尋葛藤高知天宮姬之尊。是日。火葬於佐保山陵。

c聖武太上天皇喪葬司任命 『統日本紀』天平勝宝八歲五月三日条

丙辰。(中略)以從二位藤原朝臣豐成。從三位文室真人珍努。藤原朝臣永手。正四位下安宿王。從四位上黃文王。正四位下橘朝臣奈良麻呂。從四位下多治比真人國人。從五位下石川朝臣豐成爲御裝束司。六位已下十人。從三位多治比真人廣足。百濟王敬福。正四位下鹽燒王。從四位下山背王。正四位下大伴宿祢古麻呂。從四位上高麗朝臣福信。正五位上佐伯宿祢今毛人。從五位下小野朝臣田守。大伴宿祢伯麻呂爲山作司。六位已下廿人。外從五位下大藏忌寸麻呂爲造方相司。六位已下二人。從五位下佐味朝臣廣麻呂。佐々貴山君親人爲養役夫司。六位已下六人。
d光明皇太后喪葬司任命 『統日本紀』天平宝字四年六月七日条

六月乙丑。(中略)以三品船親王。從三位藤原朝臣永手。藤原朝臣弟貞。從四位上藤原朝臣御楯。從四位下安倍朝臣嶋麻呂。藤原惠美朝臣久須麻呂等十二人。爲裝束司。六位已下官十三人。以三品池田親王。從三位諱〔光仁〕。文室真人智努。水上真人鹽燒。正五位下市原王。正四位上坂上忌寸犬養。從四位下佐伯宿祢今毛人。岡真人和氣等十二人。爲山作司。六位已下官十三人。以從五位下大藏忌寸麻呂。外從五位下上毛野公真人。爲養民司。六位已下官五人。以從三位水上真人鹽燒。從三位諱〔光仁〕。正五位下石川朝臣豐成。從五位下大原真人繼麻呂等。爲前後次第司。判官主典各二人。(後略)

天武系二、三世王が天皇、皇后の喪葬へ大量に参加するに到った背景には、前章第二節④で取り上げた喪葬の同族主導の原則によることがまず考えられる。しかしながら、実はそうとばかりは言い切れないデータがある。第2表によれば八世紀初頭の持統太上天皇、文武天皇の殯の時には皇親の長官への任官率はそれぞれ百%、五十%と高い比率を示しているものの、聖武太上天皇の喪葬以降の皇親の長官任官率は真人姓氏族を除いて○%となっている。参加総人数における皇親占有率では、その時々によって多寡があり、一概には言えないものの、長官任官率の上では明らかに皇親主導型から諸臣主導型へと移行している。その原因として考えられるのは、ひとつには皇親が高位を帯する割合が減少したことが挙げられる。

喪葬関係官司の長官に任官されるのは高位高官の者が多かったが、儀式の格を保つための、当然の計らいであった。例えば持統、文武の殯の各官司長官の殆どを天武一世の諸親王が占めていた。親王の帯する品階は、諸王、諸臣の帯する位階より上位にあり、またその当時は諸臣の位階が低く抑えられ、相対的に皇親が優遇されていた所謂皇親政治の時代であった。ところが八世紀の皇位継承が草壁皇子の直系の子孫のみに限られてしまい、その草壁、文武は早逝でそれぞれ一人ずつの男子を残したに過ぎず、聖武に到っては藤原氏（光明皇后）所生の基皇太子、県犬養氏所生の安積親王の二人の男子が誕生したものの両名とも早逝し、皇位を伝えるべき男子は全て絶えてしまい、女帝孝謙天皇が独身のまま即位した。こうした状況のなかで、天武一世の諸親王が全て薨じた後は親王不在の状態が続いた。

一方諸王は皇親蔭位制の適用により、父親の位階によらず二世王は從四位下、三世王以下は從五位下に初叙位され、諸臣の蔭位が一位の嫡子であっても、從五位下に初叙位されるに過ぎないのに較べ、制度上ではかなり優遇されていた。しかし実際には高い位階を最初の段階で与えられながら、その後昇叙される者が少なかった。昇叙されたにしても初叙から十年以上を経ている場合が多く、昇進の速度は極めて遅かった。そのため最終的に到達する位階は、初叙の位階から大きく進まなかった者が多かった。こうした現象は七世紀終盤から律令公布初期にかけては諸臣に高位帯

位者が少ない事もあって、諸王はその与えられた高い位階に相応しい官職に就く者が多かったものの、時代が下がるにつれて諸臣、特に藤原氏の位階が高くなるに依り官職の座を追われ、その為考選に洩れることが多くなったことにより顕著となった。こうした実態のため、諸王は喪葬臨時官司の長官に必要不可欠であった高位を保つことが出来なくなったのである。

長官任官率の変化の原因として考えられるもうひとつの理由は、天皇の喪葬自体が天皇家の家内の事業から国家による公的事业にその性質が变化したことに求められる。持統太上天皇以降の各天皇の喪葬に設けられた臨時官司の名称の変遷を追ってみると、次のようになる。

第一期 イ、持統 作殯官司／造大殿垣司／御装束司／造御竈司

ロ、文武 供奉殯官司／造御竈司／造山陵司／御装司

第二期 ハ、元明 行御装束事／供營陵事

第三期 ニ、元正 御装束司／山作司／養役夫司

ホ、聖武 御装束司／山作司／造方相司／養役夫司

ヘ、称徳 御装束司／作山陵司／作路司／養役夫司／御前次第司／御後次第司

ト、光仁 御装束司／山作司／養役夫司／作方相司／作路司

第一期のイ、ロは未だ殯の段階にあった当時のもので、官司名称にもそれが反映されている。第二期のハは、天皇の喪葬に殯の表記が使用されなくなり、喪葬制そのものに变革の起こり始めた過渡期にあったもので、元明の薄葬に処すべき遺詔が忠実に守られた結果、任命された官人も三人の名前を伝えるに過ぎない。第三期のニ、ホ、ヘ、トに共通する特徴として挙げられるのは、その都度違っていた官司名称がこの時期には固定されているということだ。一部違いが見られるものの、第一、二期と比較するとその違いは歴然としている。

もう一つ第三期の特徴として挙げられるのは、養役夫司、作路司、造方相司等、従来見られなかった官司の出現である。またこれらの新官司は、長官に任命される官人の殆どが内外従五位で、相対的にやや低い位階を持つ官人で構成されている。御装束司、山作司といった第一、二期にはすでにその前身と見られるものが出現している官司の長官には、親王や三位以上の高官が任命されるケースが多く、第三期でも藤原豊成など太政官首班級の官人が任じられていることは対象的である。またこれらの新官司の出現は、喪葬臨時官司とそれぞれの職務の確定、分掌化が確立した結果によるものと思われる。例えば養役夫司の職掌については役夫の徵発、監督などが字面から考えられるが、その他に『続日本紀』宝亀元年（七七〇）八月四日条に「外従五位下佐太忌寸味村。外従五位下秦忌寸眞成。判官主典各二人。宮内。大膳。大炊。造酒。宮陶。監物等司一人為養役夫司」という記事があり、これを手掛りに復元が可能である。まず大膳職、大炊寮、造酒司、宮陶司などの司は宮内省の管轄下にあり、宮内省及び管轄四司の協力が注目される。佐太味村、秦眞成はこの時それぞれ左平準令、造法華寺判官の職にあったと考えられるので、宮内省との直接の関わりは不明であるが、養役夫司に参加しているこれらの職、寮、司の職掌から推測するに、養役夫司は関係者の、または献上する食膳の世話や、儀式の装飾、そしてそれらの出納の管理などの職務をも掌っていたと考えられる。第三期に新しく出現した官司の職掌は、作路司、造方相司についての詳細は不明であるが、養役夫司の例から推測すると、かなり細かく設定されていたと思われる。こうした職掌は第一、二期に既にあった官司の職掌のうちから移譲されたものと考えるのが自然であろう。その結果、御装束司などの旧来の官司の職掌は空洞化し、名譽職化されたことが予想される。こうした過程のなかで、旧来の官司の長官には高位高官の者を配するという従来の慣行が残り、新設の実務官司には旧慣にかかわらず、位は低いが現役の実務官僚を置くという形が出来たのではないか。あるいはこうした形こそ完成した官僚機構の在り方と言っても差し支えないだろう。やや推測に頼りがちで、実証に欠ける嫌いはあるが、いずれにせよ養役夫司などの新設官司は、喪葬臨時官司が官制的に整備された結果設置されたものと理解

して良いだろう。

先に触れた官司名称の固定は、もともとがその都度臨時に設けられたものであったこれらの官司が、天平廿年頃に職務の確立、分掌化によって官司としての体裁が整えられた結果そうになったのではないかと思われる。そして喪葬臨時官司が律令官制的に整備された結果、喪葬の主導的役割を国家機構が担う体制が顕在化し、天皇を国家元首として葬するという、天皇の喪葬の国家事業化、いわば八世紀型喪葬制がこの第三期に完成した。八世紀の半ばにおいて、天皇は天皇家一族の首長としてではなく、国家元首として葬られるようになり、同時にそれ以前の皇親主導による家内事業性が失われるに到ったことが、喪葬臨時官司長官への皇親の任官率の低下をもたらした理由の一つと考えられる。

このように天皇の喪葬が国家事業として遂行される時期においては、皇親としての二世王に期待される役割というのは殆ど失われていたはずである。しかし実際にはこの項の冒頭に見たように多数の二世王が参加しているのである。こうした実態の裏には皇位継承との関わりが予想される。前述の通り聖武天皇には皇位を伝えるべき男子がなく、天平十年、光明皇后を母に持つ阿倍内親王が立太子し、同十六年聖武の最後の男子である安積親王が恭仁京で薨じた頃には、後嗣を持たない独身の阿倍内親王（孝謙、称徳）に譲られた皇位を次に誰が承け継ぐか既に意識されていただろう。前掲の史料はこうした時期に行われた天皇、皇后（もしくはそれに準じた存在）の喪葬であり、皇位継承と無関係であったとは考え難い。特に光明皇太后の喪葬の時には既に舍人親王系の淳仁天皇が在位していたが、実権は紫微中台に拠って国政を牛耳る藤原仲麻呂が握っており、孝謙太上天皇も健在であった。傀儡であった淳仁とその系統が、これ以後も皇権を保持していく保証はなかったのである。次の項では、皇位継承の候補に挙げられ、天皇、皇后の喪葬に参加することとなった二、三世王達の系譜と、皇位にまつわって起こった政争、事件とのそれぞれの関わりを整理してみる。

第二節 二、三世王の系譜―それぞれの皇位継承権（系図2参照）

前節掲載の史料 a ~ d にあらわれた諸王は十五名（諸王階級にあった者が真人、朝臣姓を賜った場合もこれに含む。また同一人物が諸王時代、真人姓時代両方に登場している場合は、これを一名と数える）に上るが、このうち厚見王を除く十四名については、出自世系とも判明している。また市原王、諱（白壁王、後の光仁天皇）は天智天皇皇胤であり、残る十二名は、すべて天武天皇の孫、曾孫であることが共通している。この節では彼等の出自世系及び、八世紀中期頻繁に起こった皇位継承にまつわる政争、事件への関与の様子などを簡単にまとめてみよう。

(1) 高市親王―長屋王系諸王―安宿王、黄文王、山背王（藤原朝臣弟貞）

安宿、黄文、山背の三王は高市親王の孫、長屋王の子で、母は藤原不比等の女長娥子。神亀六年（七二九、天平改元）の長屋王の変に際しては、その母が不比等の女であったことによって、特に不死を賜った。その後それぞれ累進を重ねたが、黄文王は天平宝字元年七月の橘奈良麻呂の変に加担し、安宿王も連坐している。佐伯全成の供述によると、奈良麻呂は天平十七年に初めて全成に話しを持ち掛けた時、既に阿倍内親王が立太子しているにもかかわらず「猶無立皇嗣」として黄文王擁立を依頼している。その後変の直前には黄文に安宿、塩焼、道祖の三王を加えた中から皇嗣を選び出す運びとなっていた。黄文王は早い時期から一派に加わっていたようで、名を「多夫礼」と改名された後、杖死している。安宿王もその自由によると、変勃発に先立つ六月廿九日、黄文王にだまされたとはいえ、奈良麻呂一味の会合に参加しており、その結果妻子と共に佐渡へ配流された。一方山背王は事前に密告に及んだ功績により従三位を授けられた。またその薨伝によると、この時の功績により母の姓である藤原朝臣を名乗ることを許されたこと、こうしたことから仲麻呂の信頼を受け、仲麻呂政権下で出世していく。

彼等の世系は三世王にあたり、順当に考えれば他の二世王達に較べると皇位からはやや遠い存在であった。にもか

かわらず何故奈良麻呂一派は黄文や安宿を候補としたのだろうか。奈良麻呂と黄文らとの個人的関係を想定すべきかもしれないが、少なくとも計画に賛同した人々の合意を得るだけの資質は持っていた筈である。それは彼等の祖父、父が置かれていた特殊な地位に拠っていたと思われる。高市親王は前章で既に述べたように、有力な皇位継承候補者であった。その上草壁皇太子崩後の持統朝には太政大臣に任命されていた。この時期の太政大臣は、皇太子と同様の職能を持ち、例えば近江朝の太政大臣大友皇子は皇太子摂政と変わらぬ権能を有していた。しかもその高市の死の直後に軽皇子（文武天皇）の立太子があったため、皇太子に準ずる地位にあったものとして意識されていたと思われる。また父の長屋王はその高市皇子の子として嘱望された人物である。慶雲元年（七〇四）正月七日の初叙位では、選叙令藤原親条の規定より三階上の正四位上を授けられ、和銅七年（七一四）正月三日には二品長親王など四親王と共に封戸を賜い、同時に益封、封租の全給をうけ、あたかも親王に準ずる扱いを受けている。また婚姻関係では藤原長娥子を迎えていることは、藤原不比等との良好な関係を想起させる上に、正室には草壁皇子の女吉備内親王を娶っており、文武嫡系の血をも自家に引き入れていた。高市皇子はその薨記事に「後皇子尊」の尊称を用いられているが、この時期に「皇子尊」の尊称を用いられていたのは高市の他は草壁だけであり、また長屋王の母は天智天皇の女御名部皇女であった。母方の血筋、世系、資格、どれを取っても文武天皇にもひけを取らない資格を持っていた長屋王の子であった安宿王らが、三世王の世系にあったとしても、皇位継承有資格者として重きをなしていたことは間違いない。

(2) 長親王系諸王（智努王（文室真人智努）、大市王（文室真人大市）、石川王^①）

長親王系諸王のうち、最も注目されるのは文室真人を賜姓された智努、大市の二人である。石川王については神龜三年正月に無位から従四位下に叙せられ、宮内卿、行幸次第司などを経た後、元正太上天皇喪葬の山作司を拝任した後の消息はわからない。智努王は天平勝宝四年九月廿二日に文室真人を賜っている。大市王は天平勝宝三年から同六年までの消息が不明であるが、史料^①には文室真人大市と見えるので、おそらくは同四年に智努王等と共に真人

姓を賜ったものと思われる。彼等の様に皇親階級にあった者が、新しく氏名と姓を得ることは、即ち皇親からの離脱、そして同時に皇位繼承権も放棄することである、という認識が一般に行われているように思われるが、実際はいかなものであっただろうか。というのは『続日本紀』天平宝字三年六月廿二日の参議従三位氷上真人塩舩が皇親の季禄支給に関する奏上を行っている記事に注目すると、令の規定では皇親優遇の為支給されていた春秋の禄（季禄）が、現在では諸臣と同じように上日（出勤日数）を計って支給されているが、これを止めて令の規定通り優遇の意味で支給されるよう奏上している。これは皇親階級の利害を代表する行動といつてよい。塩舩は後に仲麻呂によって非法法ではあるが天皇に擁立されている。氷上真人賜姓は、奈良麻呂の乱に縁坐すべき処を許された一年後のことで、あるいは罰則の爲になされたものと理解すべきであろう。罰則による真人賜姓の例としては、淳仁廃帝に縁坐した守部王、三原王等の男が三長真人を賜い、丹後国に配流されたものがあつたが、宝龜二年に許され皇籍に復している。罰則による賜姓であれば数年を経た後に復籍する例が多いから、真人賜姓^①臣籍降下^②皇位繼承権の喪失という図式は一概には成立しない。勿論全ての真人姓氏族に皇位繼承権が存在するわけではなく、例えば氷上、文室等天武二世王が真人賜姓された者、その第一世代に限っては、有事には皇籍に復帰し、皇位繼承者たりうる資格を持っていたと考えられる。そしてその世代が没すれば、すぐに解消されてしまふ性質のものであることが予想される。

宝龜元年八月四日、終に後継者を残すこと無く称徳天皇が崩じた。『続日本紀』によれば同日、左大臣藤原永手が称徳の遺宣を読み上げ、天智天皇の孫にあたる白壁王を太子とすることを宣したという。一方『日本紀略』同日条「百川伝」によれば、称徳天皇の死をうけて右大臣吉備真備等は後嗣に文室浄三真人（智努）を推したという。だが浄三はこれを固辞して受けず、次に真備が推したのは浄三の弟大市であつた。しかしこれも固辞して受けず、百川、永手、良継らの策略によって白壁王の皇太子冊立が決定したという。これは光仁、桓武朝の寵臣であつた藤原百川の伝記に拠つた記事であるから、これをすべて事実として認定するのは危険であるが、この時期の浄三、大市兄弟はそ

れぞれ従二位大納言、従三位参議の地位にあって、天武系皇親中最高位にあり、天武系皇統の継続を願う勢力に最も期待されていたであろうことは、想像に難くない。

(3) 舍人親王系諸王（三原王、池田王（親王）、船王（親王）、和氣王（岡真人和氣））

この系統からは淳仁天皇（大炊王）が即位して、三原、池田、船等はその兄弟、和氣王は三原王の子で、本来三世王世代に属する。天平宝字元年四月四日、前月廿九日の道祖廢太子をうけ、孝謙天皇は群臣を召して、皇嗣の選定に付き尋ねられた。この時の孝謙の勅にいわく「宗室中。舍人。親田部兩親王。是尤長也、因茲。前者立道祖王」とあり、舍人系は、新田部系と並び、この頃最も皇位に近い系統のひとつであった。三原王は天平勝宝四年に既に亡くなっていたが、池田王はこの時文室智努、大伴古麻呂に皇嗣に推され、船王は孝謙の勅の中で閨房の乱れを指摘され、退けられているとはいえ、候補者のうちに入っていたのは間違いない。池田、船兩王は天平宝字三年六月十六日に親王に格上げされ、三品を授けられているが、同八年藤原仲麻呂に通じた罪により親王位を剝奪、諸王となり配流され、その後の消息は不明である。岡真人和氣は史料上の天平宝字四年以後、同五年十月の節部（大藏）卿就任までの間に王に復籍したらしい。仲麻呂の乱には淳仁を中宮院に包囲するメンバーに入っていた。この功績に対し、勲二等、功田五十町を賜ったが、天平神護元年八月朔、皇位を窺い、己が怨む男女二人（天皇と道鏡）を呪ったとして謀反が発覚、即日誅せられた。『続日本紀』同日条には和氣王党派として栗田道麻呂、大津大浦、石川永年等を掲げており、彼を推す勢力の存在が少なからずあったことが知られる。

(4) 新田部親王系諸王（塩焼王（氷上真人塩焼）、道祖王）

天平勝宝八歳五月二日、聖武太上天皇が崩御、遺詔して新田部親王の子道祖王を皇太子に定めた。しかし翌天平宝字元年三月には「身居諒闇。志在淫縱」として廢太子、塩焼王は同年四月四日の皇嗣選定の折、藤原豊成、永手等の推挙を受けている。前項でも触れたが、新田部系諸王は舍人系と共に、この頃最も皇位に近いところにいた。同年七

月の橘奈良麻呂の変においても両王は、長屋王の子安宿、黄文等と共に奈良麻呂一派の皇位継承候補者に名を連ねていた。道祖王は奈良麻呂の変において捕らえられ、名を「麻度比」と改められ、杖死している。塩焼王は同八年九月、藤原仲麻呂の乱において、逃亡した仲麻呂に擁立され天皇を称したが、仲麻呂と共に滅亡した。

塩焼王は聖武の女不破内親王を娶っており、その間に志計志麻呂、川継の二人の男子を儲けていた。聖武の女を娶り、しかも子まで成していることは、塩焼の皇位継承に好材料であった。何と言っても聖武が承継してきた天武直系の血を承け継ぐ男子である。同様に聖武の女井上内親王を正室にした白壁王の皇位継承の決め手が、二人の間に儲けられた他戸親王にあったとすれば、資格において塩焼は白壁王にひけを取らなかった筈である。

(5)天智天皇―施基親王系諸王―白壁王（光仁天皇）、市原王

白壁王は天智天皇の孫、施基親王の子で天智系二世王にあたる。市原王は『本朝皇胤紹運録』によれば、父は安貴王、祖父は春日王で施基親王の曾孫にあたる。皇位継承とは関わりないが、光仁天皇の女能登内親王を娶り、二子を儲けている縁によって出世の糸口を撞んだものと思われる。

白壁王は前項で触れたように、聖武の女井上内親王を正室に迎え、天武系直系の血を承け継ぐ他戸親王が誕生したことにより、天智系でありながら皇位継承レースに参加する資格を持つに至ったもので、宝亀元年の即位の前後に初めて皇位継承候補として認識されるに至ったわけではない。³²河内祥輔氏は、『水鏡』の記事に井上皇后、他戸皇太子母子の廃后、廃太子のあった宝亀三年の時点で皇后は五十六歳、皇太子は十二歳とあることから、もしこれが正しいとすれば他戸は天平宝字五年の誕生となり、これより数年前には井上と白壁は結婚して、皇位継承の芽が出て来たのもそのあたりの時期と考えておられる。ただこれだと井上四十四歳の出産となり、その後酒人内親王も出産しているのでやや高齢過ぎる感があり、それについては、井上は斎内親王として二十三年間伊勢に住し、弟安積親王の死によって伊勢より退下したのは天平十六年なので、実際に結婚、出産はもう少し早い時期に行われていたかもしれないと

している。その根拠は白壁王の天平宝字元年に正四位下に昇進して以来、異常とも言える早さで昇進していることをあげておられる。

第三節 二、三世王の経歴と位階の上昇と官歴を中心として（第3表参照）

史料 a \ d に見える諸王は、実はこの時代の諸王のなかでも例外的に累進を重ね、出世した者が多い。勿論二世王と三世王では世系が違ふし、同じ世系のうちにあつても、年齢が大分離れている者もあるので、一括して取り上げることは難しいと思われる。そこでここでは便宜的に天平元年を境に設け、それ以前に初叙された者、それ以後にされた者とに分ける。この根拠は、二世王で誕生の遅かった者と三世王は、初叙が天平十年前後に固まっている傾向がある為である。

イ、天平元年以前①三原王②船王③智努王④石川王

このグループは全て二世王で構成されている。イのグループに共通する特徴として、初叙から次に昇叙されるまでの期間が非常に長く、全て十年以上を要している。しかも二度目の叙位から三度目までの時間も全て十年以上経過している。このような傾向は第二章第一節で触れた理由による。だが殆どの者は二度目、三度目の昇進のあたりから、位階の上昇、官職就任が頻繁になつて行く。またその中でも傾向が二つあり、ひとつは天平十年前後を境として位階の上昇、官職就任が頻繁になる①③④と、もうひとつは天平宝字元年前後をその境とする②である。

前者のターニングポイントとなる天平十年は阿倍内親王の立太子があつた年である。このまま阿倍の即位が実現すれば、その後の皇嗣が問題となるのは火を見るより明らかである。この時期にはまだ安積親王が生存していたが、藤原氏の血を引いておらず、また未だ幼少の身であつた。勿論最大の皇位継承予定者ではあつたが、何か事が起こった時のため、皇位継承候補者の枠を広げておく必要があつたのではなからうか。イのグループのうち、③は天平十八

第3表 天武, 天智系二, 三世王の位階昇進, 官職任官, その他重要事項表

王 名	年 月 日	事 項
三原王	養老 元・正・4	無→従四下
	天平 元・3・4	→従四上
	9・12・23	彈正尹
	12・9・11	伊勢奉幣
	18・3・16	大蔵卿
	同・4・22	→正四下
	19・正・20	→正四上
	20・2・19	→従三
	同・4・22	元正山作司
	天平勝宝 元・8・10	中務卿
	同・11・26	→正三
船王（親王）	神亀 4・正・27	無→従四下
	天平 15・5・5	→従四上
	18・4・11	彈正尹
	天平宝字 元・5・20	→正四下
	同・8・4	→正四上（奈良麻呂の変の褒賞）
	2・8・1	→従三（淳仁即位）
	3・6・16	→親王三品
	同・8・6	香椎廟派遣
	4・正・4	信部（中務）卿
	同・6・7	光明装束司
	6・正・4	→二品
	8・10・9	↘諸王, 隠岐流罪
智努王（文室真人）	養老 元・正・4	無→従四下
	神亀 5・11・3	皇太子造山房長官
	天平 元・3・4	→従四上
	12・11・21	→正四下
	13・8・9	木工頭
	同・9・8	造宮卿
	同・9・12	恭仁京派遣
	14・8・11	紫香樂離宮司
	18・4・22	→正四上
	19・正・20	→従三
	20・4・22	元正御装束司

王 名	年 月 日	事 項
石川王	天平勝宝 4・9・22	文室真人賜姓
	6・4・5	摂津大夫
	同・7・20	大皇太后御装束司
	8・5・3	聖武御装束司
	天平宝字 元・6・16	治部卿
	2・6・16	出雲守
	4・正・4	中納言
	同・6・7	光明山作司
	5・正・2	→正三
	6・正・4	御史大夫
	同・11・3	伊勢奉幣
	同・12・1	神祇伯
	8・正・7	→従二
	神亀 3・正・21	無→従四下
	天平 9・11・19	宮内卿
	12・10・23	行幸御後長官
	同・11・21	→従四上
	14・8・22	行幸後方次第司
	20・4・22	元正山作司
塩焼王（氷上真人）	天平 5・3・14	無→従四下
	12・正・13	→従四上
	同・10・23	行幸御前長官
	同・11・21	→正四下
	14・8・22	行幸前方次第司
	同・10・12	拘禁
	同・10・17	伊豆三嶋流罪
	17・4・15	召還入京
	18・閏9・7	復本位
	天平勝宝 8・5・3	聖武山作司
	天平宝字 元・5・20	→正四上
	同・6・16	大藏卿
道祖王	3・6・22	皇親季祿奏上
	8・9・18	仲麻呂の乱、天皇擁立さる。
	天平 9・9・28	無→従四下

王 名	年 月 日	事 項
池田王（親王）	10・閏7・7	散位頭
	12・11・21	従四上
	20・4・22	元正山作司
	天平勝宝 8・5・2	立太子
	天平宝字 元・3・29	廃太子
	同・7・2	奈良麻呂の乱，自宅包囲さる。
	同・7・4	杖死
	天平 7・4・23	無→従四下
	天平勝宝 6・正・16	→従四上
	同・7・20	大皇太后造山司
	同・11・1	畿内巡察使
	8・12・30	元興寺派遣
	天平宝字 元・5・20	→正四上
	同・6・16	刑部卿
	2・8・19	伊勢派遣
	3・6・16	親王三品
	同・7・3	糾政（彈正）尹
	4・6・7	光明山作司
	8・10・9	↳諸王，土佐流罪
安宿王	天平 9・9・28	無→従五下
	同・10・20	→従四下
	10・閏7・7	玄蕃頭
	12・11・21	→従四上
	18・4・11	治部卿
	天平勝宝 元・8・10	中務大輔
	3・正・14	→正四下
	5・4・22	播磨守
	6・7・20	大皇太后御装束司
	同・8・4	同上誅
	同・9・4	内匠頭
	8・5・3	聖武御装束司
	8・12・30	山階寺派遣
	天平宝字 元・7・4	佐渡流罪
黄文王	天平 9・10・20	無→従四下（誤記カ）

王 名	年 月 日	事 項
山背王	11・正・13	從五下→從四上
	12・11・21	→從四上
	13・7・3	散位頭
	20・4・22	元正御裝束司
	天平勝宝 8・5・3	聖武御裝束司
	天平宝字 元・7・4	杖死
	天平 12・11・21	無→從四下
	18・9・19	右大舍人頭
	天平勝宝 8・5・3	聖武山作司
	同・12・20	大安寺派遣
	天平宝字 元・5・20	→從四上
	同・6・16	但馬守
	同・7・5	→從三
	4・正・16	坤宮大弼
	同・6・7	光明裝束司
	6・12・1	参議
	天平 11・正・13	無→從四下
	15・6・30	刑部卿
	16・閏正・11	安積監護喪事
大市王（文室真人）	18・4・11	内匠頭
	20・4・22	元正御裝束司
	天平勝宝 3・正・25	→從四上
	6・7・20	大皇太后造山司
	同・9・4	大藏卿
	天平宝字 元・5・20	→正四下
	同・6・16	彈正尹
	3・11・5	節部（大藏）卿
	5・6・26	→正四上
	同・10・1	出雲守
	8・9・25	民部卿
	天平神護 元・正・7	→從三
	2・7・22	参議
	宝龜 元・8・4	称徳裝束司
	同・10・1	→正三

王 名	年 月 日	事 項
白壁王（光仁天皇）	天平 9・9・28	無→従四下
	18・4・22	→従四上
	天平宝字 元・5・20	→正四下
	2・8・1	→正四上
	3・6・16	→従三
	4・6・7	光明山作司
	6・12・1	中納言
	8・9・12	→正三
	天平神護 元・10・13	行幸御前次第司
	2・正・8	大納言
	宝亀 元・8・4	立太子
	同・10・1	即位
和氣王（岡真人）	天平勝宝 7・6・24	岡真人賜姓
	天平宝字 3・6・16	正六上→従四下
	同・7・3	内匠頭
	4・6・7	光明山作司
	5・10・22	節部（大藏）卿
	7・正・9	伊与（予）守
	8・正・7	→従四上
	同・9・20	→従三（仲麻呂の乱の褒賞）
	同・10・9	淳仁を中宮院に包囲
	同・10・20	丹波守
	天平神護 元・8・1	和氣王の変

* 1 この表は『続日本紀』により、位階の昇進、官職の就任の日時が明らかなもののみを対象として作成した。日時の不明なものは削除した。なお下限は光仁天皇即位の宝亀元年とした。

* 2 事項欄の→は位階の昇進を表す。↘は親王から諸王に格下げされたもの。また無は無位を表し、位階の位は省略した（例：従四位下→従四下）。

十九年に位階の昇進があり、従三位まで昇進している。また天平十三～十四年頃は造宮関係に多く活躍し、ここで聖武に信頼されていたであろう様子が伺え、その後の昇進に大きく影響したであろう。①も同十八～廿年の間、三回の昇進があり、同じく従三位に昇った。天平十六年に安積親王が薨じた直後のことであった。

後者は天平宝字元年から同二年の間に従四位上から従三位に一気に昇進している。これは兄弟の淳仁天皇即位による縁であることは明白である。

ロ、天平元年以後①塩焼王②道祖王③池田王④安宿王⑤黄文王⑥山背王⑦大市王⑧白壁王⑨和氣王

このグループは殆どが天平十年以後に初叙されている。イのグループとは違い昇進の極端に遅いものは少ない。⑥⑦⑧にあまり動きが無い事を除けば、なかなか順調である。これはイと同じく阿倍立太子による影響であろうが、誕生、初叙が遅かったことが逆に幸いしている。イ、ロ両グループに共通している事だが、もうひとつのターニングポイントとして、天平宝字元年と同八年が注目される。前者は言うまでもなく橘奈良麻呂の変があった年で、②④⑤が消えている。逆に密告により昇進した⑥、淳仁即位の縁により昇進した②③にとっては飛躍の年であった。後者は藤原仲麻呂の乱の年で、ここでは②③が没落した。

右に見るように、皇位継承に関する何らかの動きがあった時、または皇位に関わるような重大事件は、それぞれの飛躍、もしくは没落のターニングポイントとなっていた。勿論諸王階級の者だけに大きな転換が訪れる訳ではないが、こと皇位にかかわる事件は、皇位継承候補者にとってはそれこそ重大事であったのだ。またこうした事件にあまり関わっていない者にとっても、競争者が少なくなればなる程に自己に有利になっていったのである。

また天皇、皇后の喪葬への参加が転機となった者もいる。①は天平十四年十月十二日、突然下獄し、同月十七日には伊豆国三嶋に流された。理由は詳かではないが、『続日本紀』天平宝字元年四月四日条に「塩焼王者 太上天皇責以無礼」と見えるのと関係があると思われる。同十七年には許されて入京、翌年には本位に復するが、しばらく表立っ

た活躍は見えない。しかし天平勝宝八歳（史料d）の聖武喪葬で山作司を勤めた後、翌天平宝字元年には正四位上に昇進、大蔵卿に就任している。またすでに触れた様に、退けられはしたが藤原豊成等に皇嗣に推挙されている。塩焼の政界復帰は聖武喪葬への参加がきっかけであったと考えられる。同様に⑨は、天平勝宝七年に岡真人を賜わった後、天平宝字四〜五年頃に皇籍に復帰したと思われる、『続日本紀』天平宝字五年十月廿二日条では和氣王と表記されている。前年の六月には光明喪葬の山作司を勤めているので、これが皇籍復帰の契機になったと考えられる。

むすびにかえて

史料a〜dに登場した諸王達のなかで、殆どの者が皇位継承にまつわる出来事、事件に関係している。史料中に見える天武、天智系の二、三世に属する者で、そうしたことに全く関係していなかった者は皆無と言ってよく、逆説的に言えば、そうであったからこそ、国家的事業となった天皇、皇后の喪葬に彼等が参加する意義があった。繰り返しのことになるが、天皇の殯は、次期天皇の選定、確定の場であったが、律令制導入によって、そして皇位継承法の転換により、その要素が失われ、殯そのものに変質をきたしたことは既に述べた通りである。また天皇、皇后の喪葬が、家内の事業から国家的事業へと変質したことも既に述べた通りであって、そうした意味からは、二、三世王の喪葬参加は非常に矛盾した現象であった。しかしこの奈良時代中期は、天武―（草壁）―文武―聖武と続いてきた直系相承による皇位の継承が、まさに途切れようとしていた状況にあって、天平十年には阿倍内親王が立太子したものの、橘奈良麻呂は「然猶無立皇嗣」と発言していた。未婚の内親王の立太子は認めないという意図のもとに行った発言であろうか。未婚の内親王の皇位継承は、例えば元正の様に、次に継承すべき男子が控えている仲継ぎ天皇であることが当然望まれていただろう。当時奈良麻呂の発言に代表される様に、皇位継承に関する危機意識が宮廷内外に拡がっていたことは容易に想像できる。八世紀中期の天皇、皇后の喪葬において、天武系、天智系の皇位継承資格を持つ二、三

世王の参加が顕著であることは、本来天皇の殯が持つ次期天皇決定の意義が、右の如き状況下において復活、再現された現象と理解すべきであろう。

様々な紆余曲折を経て、宝亀元年には天智系の白壁王が立太子、光仁天皇の即位という結果に落ち着いた。白壁王擁立の決め手が他戸親王の存在にあったことは、同年の井上内親王立后、翌年の他戸立太子という、一連の予定調和的推移によって立証される。ここで天武系皇統は一度断絶に追い込まれたが、聖武に承け継がれた天武直系皇統の血が流れる他戸が即位することによって、もう一度復活する予定であった。しかし同三年には井上皇后の厭魅大逆事件によって廃后、廃太子が行われ、代わりに高野新笠所生の山部親王（桓武）立太子が実現したことは、天武系皇統の最終的な断絶を意味し、天武系諸王は皇統から排除されるに到った。

天応元年十二月廿三日、光仁太上天皇が崩御し、即日喪葬臨時官司の任命があった。任命された官人三十名は全て諸臣であった。うち真人姓氏族が十一名（文室氏一七名、多治比氏二名、淡海氏一名、豊野氏一名）を占め、長官に任命されたのは真人姓が1、その他諸臣が4となっている。真人姓氏族は皇親勢力のうちに数えられ、特に天武系である文室、豊野氏が大勢を占めているのが注目されるが、ここに参加した者は真人賜姓された者の次の世代（三世）以降に属すると思われ、皇籍を離れて世代が経過し、当然皇位継承権を持ち合わせてはいなかった。また諸王階級以上の参加はここでは全く見られない。八世紀初頭の未だ殯の段階にあった³⁴持統、文武の喪葬にみられた同族主導の原則は既に失われていた。

また皇位継承の要素については、既に若い桓武天皇が即位し、その後継者選定を急ぐ必要はなかった上、復活した天智系皇統の安泰のもとでは、その意義も既に失われていたのであろう。八世紀中期に見られた天皇、皇后の喪葬への天智、天武系二、三世王の大量参加は、皇統存続の危機的状況下において起こった特異な現象であり、普遍的なものではなかったと考えるべきだろう。

註

- (1) 天皇の場合大葬という語を使うことがあるが、『令義解』喪葬令第廿六の割註に「謂。喪者。死屍称也。葬者。藏也」とあるように、この時代には喪儀と葬儀は別物であったので、この稿では特に喪葬という語を使用する。
- (2) 折口信夫 「上代葬儀の精神」 『折口信夫全集』二〇
- (3) 和田泰氏の論、文章借用については註(12)の部分を除いて、氏の『殯の基礎的考察』『史林』五二―二、に拠るので、以後一々註記しない。
- (4) 北山茂夫 「持統天皇論」『日本古代政治史の研究』、直木孝次郎 人物叢書『持統天皇』
- (5) 『日本書紀』天武十年二月朔条
- (6) 同時期に山背大兄、古人大兄、中大兄の三人が存在していたこともある。大兄制は荒木敏夫氏『日本古代の皇太子』に詳しい。
- (7) 蘇我倉山田石川麻呂の女遠智娘。
- (8) 瀧浪貞子 「光明子の立后とその破綻」『史窓』四、によれば、皇后の存在が立太子を引き出す鍵になるという。
- (9) 大友皇子の母は伊賀采女宅子娘で、卑母の出自であった。
- (10) 註(2)に代表される。
- (11) 五来重 「遊部考」『仏教文学研究』一、に代表される。
- (12) 和田萃 「飛鳥、奈良時代の喪葬儀礼」『東アジア世界

における日本古代史講座九 東アジアにおける儀礼と国家』

- (13) 『日本書紀』大化二年三月甲申条
- (14) 『同右』敏達十四年八月朔条
- (15) 註(14) 同
- (16) 註(4) 北山氏の論文に同じ。
- (17) 『日本書紀』欽明廿三年八月条(日欠)に「大臣(中略)居輕曲殿」とある。
- (18) 『弓削皇子について』『萬葉集研究』第六集
- (19) 『令義解』喪葬令百官在職薨卒条
- (20) 『日本書紀』天智六年二月朔条
- (21) 『同右』允恭天皇即位前記
- (22) 大塚初重氏は「大化薄葬令」が遵守された結果、後期古墳が終末を迎えたとする。〔古墳の変遷〕『日本の考古学』四)
- (23) 「大化薄葬令の再検討」『法学論叢』八五―五
- (24) 高門朝臣廣成、廣世は文武天皇の嬪石川朝臣刀子娘の子で、母が和銅六年に嬪を削られた時に属籍を削られたという説もあるが、筆者は同意出来ない。(栗田寛 『新撰姓氏録考証』。角田文衛 『首皇子の立太子』『律令国家の展開』)
- (25) 『令義解』選叙令蔭皇親条
- (26) 倉本一宏 「皇親冠位の変遷について」『続日本紀研究』二四九

(27) 直木孝次郎 「律令官制における皇親勢力の一考察」

『奈良時代史の諸問題』

(28) 佐太味村は神護景雲三年五月廿七日、秦真成は神護景雲二年七月朔にそれぞれ任命されている。

(29) 『続日本紀』天平宝字元年七月四日条

(30) 沢田浩氏は石川王を長親王の子で、二世王であったとする。(『薬師寺縁起』所引天武系皇親系図について)『国史学』一四二

(31) 池知正昭 「奈良朝皇親賜姓の意義」『紀要』31(青山学院大学、文)

(32) 「光仁系皇統の成立」『古代政治史における天皇制の論理』

(33) 『日本古代人名辞典』など、和気の復籍を天平宝字三年六月に淳仁天皇が、舍人親王の追尊にちなんで兄弟を親王

となした時、同時になされたと解釈するむきが多いが、同四年六月の光明皇太后山作司に任命された時には、まだ真人姓を帯している。確かに正六位上から従四位下への昇進は皇親蔭位の適用であると思われるが、単に恩典による二世王扱いと解釈すべきではないだろうか。

(34) 持統、文武の殯において、臨時官司長官に親王の任官率が高いことは、一見皇位継承との関係を想起させるが、持統の殯は文武即位の後であるし、文武崩御の慶雲四年(七〇七)には首皇子が既に存在していた。首皇子の立太子は和銅七年(七一四)で、未だ立太子の儀は行われていなかったが、元明即位宣命に見られる「不改常典」によって首皇子の皇位継承は約束されており、単に同族主導原則の現れと見るべきであろう。